

Fate/Grand Order 亞種  
特異点:?? 三都分裂国  
家日本

小々波海月

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

近未来観測レンズシバが新たに観測した特異点は、並行世界の日本であった。

調査に乗り出すカルデアとそのマスター藤丸立香。そこで目にしたのは、壁により三つに分裂し、対立の果てに荒廃した日本と、謎の怪人ローそして、それと戦う謎のヒーローの姿であった。

※この作品は仮面ライダービルドおよびFate／Grand Orderのクロスオーバー作品となっております。

# 目次

	プロローグ	1
10	0 1. 特異点をサーチせよ	1   1



# プロローグ

「全く、本当に面白い生き物だ……人間ってのは」

部屋の中に壮年の男性の声が響き渡る。部屋の中央にぼつんと置かれたソファ。そこに声の主は座っていた。白い装甲に覆われた、ヒトとは似ても似つかぬまさに「怪人」と呼ぶにふさわしい存在が——そこにはいた。その手の中では、黄金の杯が鈍い輝きを放っている。

「万能の願望器——まさかこんな物を人間が創りだしていたとはねえ……お陰で俺も『コレ』を愉しめるわけだが」

その視線の先には、空中に投影された何千、何万——数えるのも気が遠くなるような映像の数々があつた。その中にどれ一つとして同じものはなく、千差万別の物語を紡ぎ出している。時折、映像が泡のように消え、再び新しい映像が始まる。その繰り返しだ。

映像の中では、戦い、傷つき、絶望し、泣き、そして最期には——死んでいく。「人間」の姿が映し出されていた。極限の状況下で人間は、理性の服を脱ぎ捨て、その下の本性を剥き出しにする。——何もかもに絶望して抗う事を止める者、他者を蹴落としてでも

自分だけは生き残ろうと足掻く者、社会秩序の崩壊を良いことに非道の限りを尽くす者、そして――この状況の中でも諦めず希望を胸に戦う者。

部屋の中に哄笑が響き渡る。どうしようもなく、弱くて、ちっぽけで、愚かで、哀れで、――それでいて愛おしい存在。

「これだから俺は人間が大好きなんだ！」

「だからよ、精々俺を愉しませてくれよ？　――戦兔オ？」

――怪人の目線の先にある映像には、傷つきながらも戦う青年の横顔が映し出されていた。

――

「おはようございます、先輩」

「あと五分……」

「ダメですよ先輩！　健康的な生活は早寝早起きからと、ナイチンゲールさんも仰ってました。さあ！」

マシユはその細腕からは想像できないような力で、布団を剥がしにかかる。抵抗して

みたものの、寝起きで上手く力が入らず、あえなく撃沈。

「マシユの意地悪……」

「私知ってるんですよ。先輩が、昨日夜遅くまでインフェルノさんや孔明さんとスマ○ラで相当exciteしてたこと」

後輩に夜更かしを指摘され、ウツと言葉に詰まる。二度寝を諦め、もそもそいつもの制服に着替えた。

「今日の朝食はなんでしよう？ 楽しみですね！」と声を弾ませるマシユにと共に食堂へと向かう。食堂はスタッフやサーヴァント達によりいつものようにごった返していた。カウンターキッチンの方こう側では、料理上手なサーヴァント達が生き生きとその腕を振るっている。

「おはようマスター、今日は何にする？」

カウンターキッチンの向こう側から顔を出したのは、弓兵クラスで召喚されたサーヴァント、エミヤだ。黒いエプロンが大変よく似合っている。

「えつと……ご飯と味噌汁？」

「それだけじゃ栄養が足りないなマスター。焼き魚と野菜も付けよう。……マシユは？」

「それでは私も先輩と同じものを！」

「了解した」

程なくして出てきた完璧な「ザ・日本の朝食」といった風情の朝食に舌鼓を打ちつつ、マシユと今日の予定について話し合っていた時であった。

『あーあー、藤丸立香くん、マシユ。聞こえてる？ 至急管制室に来て欲しいんだ』  
カルデア全体に響き渡る放送。その声の主はやはりというかなんというか、現カルデア最高顧問にして万能の天才、レオナルド・ダ・ヴィンチその人だった。

「一体何があつたんでしよう……？」  
「さあ……？」

——

「おはよう、立香くん、マシユ。突然呼び出してすまないね。早速だが、二人に見てほしいものがあるんだ。新たな特異点が、先程シバによつて観測されたんだ」

管制室へ向かうと、いつになく真剣な顔をしたダヴィンチちゃんに迎えられた。その言葉と同時に近未来観測レンズシバにより観測された映像が映し出される。それは自分にとっては非常に見慣れた懐かしい故郷——日本であった。——ある一点を除けば。

「なに、これ……」



「この赤い光は一体なんなのでしょうか……?」

国を三つに分断するかのようには赤い光が走っている。少なくとも自分が知っている日本にこんなものはなかった。

「これ、日本なんだよね……?」

「間違いなく日本だよ。ただ、立香くんが知っている日本——つまりこの世界の日本ではないってことさ」

「それはつまり、並行世界……ということでしょうか?」

「そういうことになるね。無数に枝分かれし、分岐する世界。その一つの可能性。ただ、本来ならそのような世界をシバが観測することはない。ただ——」

「ただ?」

「立香くんは、新宿の亜種特異点を覚えているかい?」

「ええ、まあ」

「あの時、新宿は完全に隔離された世界で、新宿より外がそもそも存在しなかっただろう? あれと同じようなことがあの日本でも起こっている。そして——この特異点を創り出すために聖杯が使われているのは間違いないと思うんだ」

「シバで観測できたのはここまでだね、内部の状況がどうなってるか分からない——いや正確に言えば『見られない』んだ」

「正直、イレギュラーすぎる。そもそもこの世界ですらないとききてるしね。ただ、特異点として観測され、聖杯が使われているのは間違いない以上ー」

「君に調査を頼みたいんだ、藤丸立香くん」

ダヴィンチちゃんのいつになく真剣な眼差し。グランドオーダー、聖杯探索、それが自分に課せられたものならば。

「やります」

「先輩……」

「……君ならそう言うと思っただけ……本当にありがとう」

「まあ久しぶりに日本に行ってみたかったし」

おどけて答えてみせた自分に対し、どこか悲しげにダヴィンチちゃんが微笑んだ。

「正直、状況も分からない未知の場所に君を送り出すのは気が引けるんだけどね……、ただこちらとしても出来る限りの準備をさせてもらおう」

「そういうことなら私も同行させてもらおうか、マスター」

「オレもいるぜ、大将！」

「エミヤ先輩！ 金時さんも！」

ダヴィンチちゃんの言葉を遮るように現れたのは、先程まで厨房で料理の腕を振るっていた弓兵クラスのサーヴァント、エミヤと騎兵クラスのサーヴァント、坂田金時で

あった。

「戦力は多いに越したことはない。未知の状況下なら尚更だ。そうだろうか？」

「誰か呼びに行こうと思っていたところだったけれど……キミ達二人なら申し分ない。特異点でのマスターの護衛……頼まれてくれるかい？」

「おうよ！ 任されたぜ！」

「二人が一緒なら自分としても頼もしいよ」

「先輩！ 私も先輩が安全に調査を行えるようにしつかりサポートさせていただきますー！」

「うん、ありがとうマシユ」

「なので……」

途中で何故か言い淀んだマシユの手を、次の言葉を促すようにそつと握る。やや低めだが、柔らかく暖かい温度が伝わってくる。生きている者の体温だ。

「先輩が元気に帰って来ることを祈っています」

「先輩におかえりなさい……って、私言いたいので……」

そう言うマシユの手は微かに震えていた。並行世界、三つに分裂した日本、おまけに内部のおおまかな状況すら分からないというイレギュラーな状態だ。デミ・サーヴァントとしての力が使えなくなった今、サポートに徹するしかない自身により歯痒さを

感じているのはマシユ自身なのだろう。握る手に少し、力を込める。自分はここにいて、とても言うかのように。

「大丈夫だよ、マシユ」

「ちゃんと帰ってくるから」

「……はいっ！」

——

「立香くん、君に幸運があらんことを」

——アンサモンプログラム スタート。

霊子変換を 開始します。

ダヴィンチちゃんの声を最後に、いつもの聞き慣れた無機質なアナウンスがレイシフトの開始を告げる。白い光につつまれ、重さを無くすような感覚に陥りながら、次に目を開けた時に広がる景色に思いを馳せた——。



## 01. 特異点をサーチせよ1-1

無重力状態のようなふわふわした感覚が徐々に消え、重力が戻ってくるような感覚を覚える。この瞬間はいつもドキドキする。何故なら、どこにレイシフトするかというのは不確定だからだ。ちゃんと地面の上にレイシフト出来たら万々歳だが、空中に転送されることだってある。そんなことになったら目も当てられない。パラシユートなしのスカイダイビングは二度とごめん。

果たして、その願いが聞き届けられたのだろうか。足裏にはしつかりとした地面の感覚を感じる。とりあえず第一関門突破。ホツとしながら目を開いた先に広がっていた光景は――驚くべきものであった。

――それは巨大な壁であった。シバで観測された映像が脳裏に蘇る。日本を三つに分ける赤い光。その正体が、この壁なのだろう。そんなことを考えながら、ふと辺りを見回す。瞬間ザツ、と身体中の血の気が引く音がした。――エミヤと金時、一緒に来ていたはずのサーヴァント達がいらない。

『――立香くん?』

「!!? ダヴィンチちゃん!」

耳慣れたノイズ音が走り、いつものようにダヴィンチちゃんのホログラム映像が空中に投影される。よかった、カルデアとの通信は正常に繋がるらしい。

『よかった！ 繋がったみたいだね！ 本当にすまない！ エミヤさんと金時くんなんだがー立香くんと同じ座標に転移させるはずだったんだが、何者かの妨害が入ってね……どうやらバラけてしまったらしい。こちらでもなるべく早く合流出来るよう尽力するから、立香くんも出来る範囲でとりあえず特異点の調査を頼みたい』  
「わかったよ、ダヴィンチちゃん」

『出来る範囲で、だからね？ 危険が及ぶようなことがあったらすぐ逃げること。わかったね？』

ザザ、と再びノイズ音が走り、今度はマシユのホログラム映像が現れる。

『ああ！ 先輩！ ご無事だったんですね！ お怪我はありませんか？ こんな時私がそばにいれば……すみません』

「マシユが謝ることじゃないよ」

『先輩がなるべく早くエミヤ先輩と金時さんと合流出来るように、このマシユ・キリエアイト、尽力させていただきます』

『あーとこころで』

ゴホン、とダヴィンチちゃんの咳払いが聞こえる。

『巨大な壁のようなものが見えるんだが、それは一体?』

「詳しくは分からない。多分、日本を三つに分割していた赤い光の正体だと思う」

『ふむ……もつと近くに寄ることはできるかい?』

「やってみる」

巨大すぎるせいで距離感が狂いそうだが、ここから壁まではそこまで距離はないはずだ。周囲を警戒しながらゆっくりと壁の方向へと歩き出す。それにしても人気がない。動くものといえば、風に揺れる草ぐらいのものだ。不自然なくらいの静寂に支配されている。ー、いや前言撤回だ。近づいてみて判明したのだが、壁の周囲を護衛するかのようには灰色の制服を着た人……だろうか、が巡回している。その手には黒光りする銃器のようなものがあつた。

『これ以上は無理そうだね……』

ダヴィンちゃんかそう呟いた時だ。ドン、という重低音が響き渡る。音のした方に目をやると、無機質な装甲に覆われた怪人がそこにはいた。足元にはひしやげたスクラップが転がっている。怪人の出現により、先程まで壁の周りを巡回していた者達が一斉に銃撃を放つ。しかし、怪人はそれを物ともせず、腕を振り上げる。バキバキ、という嫌な音がしてー。

『立香くん!』



激しい銃撃音に紛れてダヴィンチちゃんの声がする。

『気づかれないうちに逃げるんだ!』

瞬間、硬直が解ける。もつれる脚でなんとかその場から逃げだそうとー

『先輩!』

マシユの悲鳴じみた叫びが聞こえた。振り返ると、一通りスクラップの山を築き終わった怪人がこちらを向いていた。銃撃音は、もう、聞こえない。逃げられるのかー? この恐怖に震える足でー?

『先輩! 早く逃げてください!』

マシユの声に急かされ、もつれる脚で転がるように走り出す。ドン! と先程と同じような音が聞こえ、衝撃で転んでしまう。見ると、すぐ後ろの地面が抉れていた。このまま逃げても追いつかれるだけだ。なにか足止めをー。

反転し、右手の人差し指で怪人を指差す。震えてうまく標準が合わないのを、左手で無理やり押さえ込んだ。

「ガンドー!」

礼装と自身のなけなしの魔術回路に魔力が奔るのを感じる。それは礼装でだいぶ軽減されているが痛みを伴うものだった。怪人に効くのかは分からない。祈るような気持ちを含めて光弾を発射する。

果たして、願いが通じたのか礼装が凄いのか（おそらく後者だろうが）、怪人はスタンガンに撃たれたかのように動きを停止させた。

（やった！）

その隙を逃さず、すかさず走り出す。願わくばずっと停止していてくれますようにーなどという甘い考えを抱いたが、そう上手くはいかないようだ。

ドン、と三度目の重低音が響き渡る。距離こそ引き離れたものの、いっどうなるか全く分からないこの状況。何か手立てはないのか、考えろ、考えろ、頭を回転させろ、何か打開策があるはずだ。考えろ、考えろ、考えろー！

「伏せてー！」

バイクのエンジン音と共に突然耳に飛び込んできたのは、見知らぬ青年の声。咄嗟にその声に従うように地面に伏せると、頭上を銃撃が飛び交う音がした。音が止むのを待つて、そろそろと顔を上げるとー！なんと、あれほどの銃撃を浴びてもなんのそのとといった様子だった怪人に、青年の攻撃が効いているようなのだ。

ブレーキ音が聞こえ、青年のバイクが近くに停まる。

「大丈夫？ 今のうちに早くー！」

「はい……！」

ヘルメットを取り、バイクから降りた青年が逃げるように促してきた。それにただた

だ領き、もつれる足で走り出す。どうやらあの青年はあの怪物に対抗できるなんらかの手段を持っているらしい。

「ーさあ、実験を始めようか」

背後から聞こえてきたのは少しカツコつけた決め台詞みたいな言葉で。続いて、シャカシャカ、と何かを振るような音が聞こえてくる。

『Rabbit!』

『Tank!』

『11Best match!』

『Are you ready?』

「変身!!?」

それはこの緊迫した空間には似つかわしくない、ともすればふざけているとも取られかねないくらいハイテンションな音声だった。逃げろ、と言われたのも忘れて思わず振り返ってしまう。

『鋼のムーンサルト! ラビットタンク! イエーイ!!?』

「勝利の法則は決まった!」

ー先ほどまで青年がいたと思しき場所に、赤と青の装甲に覆われた人が立っていた。何故だろう。初めてみたはずなのに、既視感を覚えるその姿は。

「……仮面、ライダー……」

無意識のうちに口からポロリと溢れたセリフに自分でも驚いてしまう。ー仮面ライダー。それはテレビの中のヒーローだ。小さい頃に見ていておもちゃを買ってもらった記憶もある。でも、あれは現実にはいないテレビの中だけの虚構の存在のはずだ。それが何故、ここにいる？

暫定仮面ライダーは怪物の攻撃を的確に避けつつ、蹴りやいつのまにか手にしていた剣のような武器で怪物と戦っている。戦況は仮面ライダーの方が明らかに優勢だ。たじたじ、といった様子の怪人が後ろによろける。

『Ready go!』

『ボルテックフィニッシュ!!?』

再びハイテンションな音声が響き渡り、仮面ライダーがジャンプする。突如出現したレーンのようなものに沿って、繰り出されるキックは標的をしつかり捉えてー怪物は爆発した。爆風が収まり、そこに倒れていたのは息も絶え絶え、といった様子の怪物だ。傍目から見てもあそこまで高威力らしき攻撃を受けてよく姿形を保っていられるな、と感じたが怪物なのでそこら辺は違うのだろう。仮面ライダーは怪物にツカツカと近寄ると、なにやら空のボトルのようなものの蓋を開け、怪物に向けた。すると、不思議なことに怪物の装甲が粒子状に分解され、ボトルに吸い込まれていく。粗方吸い込み終

わったあと、そこに倒れていたのは怪物ではなく、ロー人間だった。

ボトルの蓋を閉め、仮面ライダーの方も変身を解く。予想通りというか、先程助けに来てくれた青年が仮面ライダーに変身していたようだ。青年は倒れている人間の肩を揺する。もそもそと起き出したその人と二、三言葉を交わすと、倒れていた人は立ち上がる。少々覚束ない足取りながらも歩き出したその人の背中を暫く見送っていた青年は、何か思い出したような表情でこちらへと振り返る。目線と目線がかち合った。逃げろ、と言われたにも関わらずそこに止まっていた気まずさも相まって思わず目をそらすと、ローなんと青年がこちらへ向かって歩いてくるではないか。

目の前でピタリ、と立ち止まる。青年は左右で色違いの靴を履いていた。洒落だななどと現実逃避していると、目の前に手が差し出される。

「立てるか？」

気遣わしげな声音で発せられた言葉。思わず差し出された手と、青年の顔を交互に見てしまう。今はつきりと青年の顔を見たが、端正な顔立ちをしているな、などとぼんやり思っていると、しびれを切らしたのだろうか。青年が痛くない程度の力で自分の腕を引っ張り、立ち上がらせてくれた。

ローその時初めて自分が、足に力が入らずへたり込んでいたことに気づいたのだ。た。